

幼稚園教員養成課程の学生における身体表現指導の理解度について

菅家 沙由梨¹⁾、浅井 泰詞²⁾、雪吹 誠³⁾

(¹⁾ 短期大学部生活科学科、²⁾ 短期大学部ビジネス社会学科、³⁾ 人間学部児童教育学科)

Understanding for Bodily Expression Instruction for students in a Kindergarten Teacher Training Course

Sayuri KANKE¹⁾, Taishi ASAI²⁾, Makoto IBUKI³⁾

(¹⁾ Department of Living Science, Mejiro University College

²⁾ Department of Business Studies, Mejiro University College

³⁾ Department of Childhood Education and Welfare, Faculty of Human Sciences)

Abstract

This study was performed to clarify the awareness about the instruction of bodily expression to infants, and to obtain basic information for future kindergarten teacher training, by administering a questionnaire survey on the preparation of an instruction plan, actual instruction, and review of trial lessons, for 122 students who hoped to obtain a kindergarten teacher certificate. As a result, it was revealed that their consciousness about “details of play,” “preparation of tools,” “attention to safety,” and other items related directly to actual teaching was comparatively high, but their understanding of the details of “core curriculum of the teacher training course,” which is designed to develop the qualifications and abilities required for all students, including “understanding of the aims and details of individual fields” and “understanding of teaching methods and concepts for infants,” tended to be low. In future lessons of the teacher training course, it will be necessary for the students to not only understand the points of attention for actual teaching, but to also learn the details in the core curriculum of the teacher training course in order to repeatedly perform trial lessons after understanding the development and learning process in infants.

キーワード：幼稚園教育法、身体表現、幼稚園教員養成課程、運動遊び、表現遊び

1. 諸言

「幼稚園教育要領」の領域「表現」では、「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」ことを内容としている（文部科学省, 2008）。この領域「表現」は音楽や造形、劇、舞踊と専門的分野ごとに考えるだけでなく、子どもたちの日々の生活の中に表れたり表されたりする、子どもの気

持ちや思いを「表現」ととらえ、保育者がその表し、表れをあるがままに受け入れ、受容・共感していくことが大切であると述べられている（黒川, 2004）。

幼稚園教諭を目指す学生にとって、身体表現の指導法を習得することは必須であるが、多くの学生が「表現することの難しさ」に直面していることが報告されている（松村, 2016）。かつて身体表現は、保育の領域で「遊戯」と称され、歌や音楽に合わせて振りをつける内容が主であった（岡田ら, 1997）。

それが1989年の幼稚園教育要領改訂により身体表現遊びとして「保育内容（表現）」の中に盛り込まれ、以後、身体表現は、子どもが感じたり考えたりしたことを、思いのまま自由にのびのびと身体の動きで表す内容となった。しかし、このような内容の身体表現活動が保育現場で実践されていないのが現状である（高原ら, 2017）。その原因としては、身体表現に対する保育者の経験不足や、身体表現を苦手とする保育者自身の問題があげられる。保育者が自信を持って指導することで、より良い指導内容になると明確にされている先行研究はみられないが、理科などの教科では、不安の払拭や模擬授業の経験値が自信につながるということが述べられている（下井倉ら, 2014）ことから、身体表現においても不安を自信に変えることができれば苦手意識をなくしていいのではないかと考えられる。どの教科であっても、指導者が不安を抱きながら指導を行うと、その自信のなさが指導を受ける側にも伝わり、説得力がなくなり、その授業内容の信頼性が低くなってしまふことがあると考える。幼児の身体表現においても、子どもたち自身が自分自身を表現していくことに不安を抱くことがある。その中で保育者は幼児の経験や発達状況を見極めたうえで各々の「自分なりの表現」を受容し、自由な表現を創出できるように適切な環境を整えなければならない（新山ら, 2014）と述べられていることから、幼児が自らを表現していくためには、まずは指導者が自信を持って幼児の前に立ち、指導していく必要がある。これまでの先行研究において、弓削田（2009）が身体表現に関する学生の意識を調査し、身体表現は楽しい分野であり、幼児期には必要だと考える学生が多いが、同時に「難しい」という印象も多く、前向きな意欲は持ちつつも、苦手意識を抱いてしまいがちな傾向があることが報告されている。また、多胡（2008）による保育者の身体表現遊びについての意識調査の結果からも、身体表現は楽しく、コミュニケーションに繋がるが、実践内容のレパートリーが少なく画一化し、展開方法が分からないとする保育者が多い現状となっていることが報告されている。ゆえに、学生時代の学習経験が保育現場に反映されることが考えられ、幼稚園教員養成校においては「身体表現」について運動能力や体力を育む運動と捉えるだけでは

なく、創造性や自己表現力、豊かな感性を育てる一手段と認識し、その指導ができる内容を授業に取り入れ、自信を持って指導していけるように養成していくことが重要となってくる。

また、教員養成課程では実践内容だけではなく、教職課程で修得すべき資質能力の養成も行っていかなければならない。近年では「教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会」なども開催され、教職課程コアカリキュラムの内容が検討されてきている。教職課程コアカリキュラムは、教育職員免許法及び同施行規則に基づき全国すべての教職課程で共通的に修得すべき資質能力を示すものである（文部科学省, 2017）。保育内容の指導法におけるコアカリキュラムもあげられており、幼稚園教員養成課程においては、幼児期の健全な心と体を育てるために、これまでも増して幼児期の運動遊びや表現遊びの重要性を理解し、教職課程コアカリキュラムに準じた適切な指導ができる教員を育成することが求められている。

そこで本研究では、幼稚園教育法（身体表現）の授業で「運動遊び」や「表現遊び」の模擬授業を実施した学生を対象に、指導案の作成や指導実践に関するアンケート調査を行い、授業実践を行う上での幼児指導に関する留意点の理解度、および文部科学省があげている教職課程コアカリキュラムについてのどの程度理解を得ているのかを、実際に模擬授業を経験し、自身の指導に自信を持った学生と、自信が持てなかった学生の自己評価から理解度の差を比較検討し、今後の幼稚園教員養成のための基礎資料を得ることを目的とした。

2. 方法

(1) 調査対象及び方法

M大学人間学部子ども学科に所属する幼稚園教員免許取得希望者である学生で、教職科目の「幼稚園教育法（身体表現）」を受講し、研究の同意が得られた122名を対象とした。調査は2017年8月に実施し、対象者には、研究者にて作成した自己記入式質問紙調査を実施した。

(2) 調査内容・分析方法

質問内容は、幼稚園教育法（身体表現）の授業で実施した模擬授業において、指導実践での留意点をどれだけ理解できているのか、また、教職課程コアカリキュラムの内容を学生自身がどの程度理解しているかを調査するため、コアカリキュラムの内容を参考に養成課程で重要な「指導案作成・事前準備」、「指導実践」の内容と、教職課程コアカリキュラムに記載されている事項の「各領域の狙いおよび内容の理解」、「保育内容の指導方法および保育の構想の理解」を質問項目として作成した。

回答は「そう思う」「まあまあ思う」「あまり思わない」「まったく思わない」の4件法および自由記述にて評価してもらった。また、模擬授業を経験したことで自身の指導に自信を持てた学生と、自信が持てなかった学生の理解度の差の検討には、アンケートの回答を「そう思う」4点、「まあまあ思う」3点、「あまり思わない」2点、「まったく思わない」1点と点数化し、Mann-WhitneyのU検定を用いて分析した。統計学的有意水準は5%未満とした。

(3) 倫理的配慮

調査は無記名で行い、調査実施時に、調査目的、利用方法、回答は強制でないことを学生に説明し、参加・不参加は自由であることを、不参加であっても成績などへの影響はないことを説明した。その後、質問紙を配布し、研究に同意した者のみ、授業後、教室外に設置した回収箱に提出してもらった。

3. 結果

調査票は122部配布し、回収数は122部（回収率100%）であり、有効回答数は100%であった。

(1) 指導への自信

模擬授業を授業内で実践し、「実際に子どもたちに自信を持って指導できると思うか」に対する回答は、「はい」と回答した学生が48名(39.3%)、「いいえ」と回答した学生が74名(60.7%)であった(図1)。その理由を自由記述で得たところ、自信を持ってできると回答した理由は、「今回の模擬授業が自分の自信に繋がったから」、「改善点が分かったから」、「事

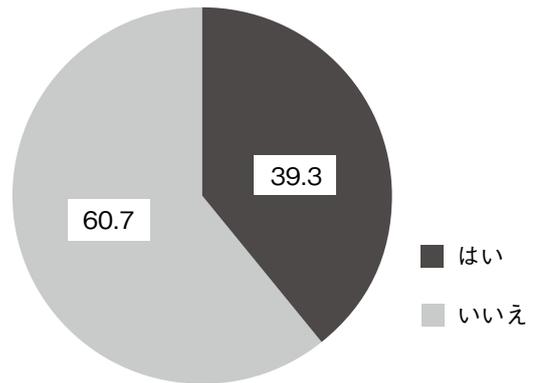


図1 子どもたちに自信を持って指導できると思うか

前準備をしっかりとしていれば何度も確認し練習できるから」等の意見があり、指導に自信を持ってないと回答した理由は、「不安要素が多く自信がないから」、「もっと練習が必要だから」、「模擬授業は大学生を相手に指導実践を行ったが、子どもを相手にすると全く違うから」等の意見があった。

(2) 指導案作成・事前準備について

模擬授業を実践し、実際に子どもたちに自信を持って指導できると回答した群（自信がある群）48名と、自信を持ってないと回答した群（自信がない群）74名で質問項目ごとに比較した(表1)。

指導案作成、事前準備についての理解度を比較した結果、「子どもたちが明るく伸び伸びと充実感を味わえる内容を考えられたか」の項目において、自信がある群が自信がない群と比べて、有意に高い($p<0.05$)結果であった。一方、「幼稚園教育要領のねらいを踏まえ指導案の作成ができたか」、「しっかり体を動かし運動できる内容であったか」、「幼児の認識、思考及び動き等を視野に入れて内容を考えられたか」、「用具や授業の準備はしっかりできたか」の4項目においては、両群間に有意な差はみられなかった。

また、「指導案を作成するにあたり一番重要だと思ったことはなにか」と自由記述で回答を得たところ、「安全の留意」、「子どもたちが楽しめる内容になっているか」、「対象年齢に合った内容であるか」、「子どもの動き（発達段階）を予想して書く」等の意見があり、「指導案作成で工夫した点はなにか」の回答には、「子どもに対する声かけ」、「図を多く入れて分かりやすくした」、「時間配分」、「環境を考

表1 各アンケート項目の検定結果

	質問項目	自信がある(n=48)		自信がない(n=74)		Z
		mean	± SD	mean	± SD	
指導案作成・準備	1. 幼稚園教育要領のねらいを踏まえ指導案の作成ができたか	3.15	± 0.46	3.14	± 0.42	0.16
	2. 子どもたちが明るく伸び伸びと充実感を味わえる内容を考えられたか	3.44	± 0.54	3.18	± 0.60	2.32*
	3. しっかり体を動かし運動できる内容であったか	3.50	± 0.55	3.47	± 0.55	0.25
	4. 幼児の認識、思考及び動き等を視野に入れて内容を考えられたか	3.13	± 0.53	3.11	± 0.56	0.14
	5. 用具や授業の準備はしっかりできたか	3.65	± 0.53	3.55	± 0.53	1.04
指導実践	1. 教場の安全確認を踏まえて授業を展開することができたか	3.42	± 0.61	3.54	± 0.58	1.13
	2. 安全への留意は重要だと思ったか	3.83	± 0.38	3.91	± 0.29	1.18
	3. 言葉かけの内容を考えながら指導できたか	3.38	± 0.49	3.19	± 0.49	1.97*
	4. 声の出し方を意識して子どもに話しかけられたか	3.42	± 0.65	3.23	± 0.65	1.60
	5. 子どもに伝わるように話すことはできたか	3.50	± 0.58	3.14	± 0.63	3.20**
	6. 指導案で計画していた時間配分で指導内容を展開できたか	3.17	± 0.63	2.91	± 0.69	2.02*
	7. 予定外のことが起こった時、臨機応変に対応できたか	3.21	± 0.80	2.92	± 0.75	2.23*
	8. 子どもたちの自己表現を楽しめるように工夫できたか	3.31	± 0.59	3.20	± 0.62	0.92
	9. 指導内容だけでなく子どもたちの状況を把握しながら授業を進めることができたか	3.35	± 0.53	3.24	± 0.57	1.00
各領域の狙いおよび内容	1. 幼稚園教育要領に示された幼稚園教育の基本を理解しているか	3.15	± 0.50	2.96	± 0.45	2.11*
	2. 幼稚園教育要領に示された授業のねらい及び主な内容並びに全体構造を理解しているか	3.17	± 0.52	2.97	± 0.55	1.92†
	3. 子どもたちが経験し身につけていく内容と指導上の留意点を理解しているか	3.25	± 0.53	3.16	± 0.52	0.89
	4. 幼稚園教育における評価の考え方を理解しているか	3.08	± 0.58	2.85	± 0.54	2.20*
	5. 実践した授業内容は小学校の授業に繋がっていく内容だったか	3.15	± 0.65	3.00	± 0.60	1.29
保育内容の指導方法および保育の構想	1. 幼児の認識や動き等を視野に入れた保育構想の重要性を理解しているか	3.21	± 0.62	3.01	± 0.56	1.82†
	2. ユーチューブを利用したり、情報機器を活用したか	2.75	± 1.34	2.62	± 1.26	0.74
	3. 指導案の構造を理解しているか	3.38	± 0.49	3.24	± 0.57	1.17
	4. 保育の現状を知ったうえで、授業内容を考えることができたか	3.21	± 0.65	3.07	± 0.60	1.23

** : p < 0.01, * : p < 0.05, † : p < 0.1

える」等の意見があった。

(3) 指導実践について

指導実践についての理解度を比較した結果、「言葉かけの内容を考えながら指導できたか」、「子どもに伝わるように話すことはできたか」、「指導案で計

画していた時間配分で指導内容を展開できたか」、「予定外のことが起こった時、臨機応変に対応できたか」の項目において、自信がある群が自信がない群と比べて、有意に高い (p<0.05) 結果であった。その他の項目においては、両群間に有意な差はみられなかった。

また、「時間配分で良かった点・改善したい点」を自由記述で回答を得たところ、良かった点では「計画通りに進められた」、「メインの活動を十分にできた」、「時間が少し余りそうなき体ほぐしや手遊びをした」等の意見があげられ、改善したい点では「時間がかかり余ってしまった」、「時間が足りなかった時のことを考えておくべきだった」、「タイマーや時計を活用すべきだった」等の意見があった。

(4) 各領域のねらいおよび内容の理解について

各領域の狙いおよび内容の理解についての理解度を比較した結果、「幼稚園教育要領に示された幼稚園教育の基本を理解しているか」、「幼稚園教育における評価の考え方を理解しているか」の2項目において、自信がある群が自信がない群と比べて、有意に高い ($p < 0.05$) 結果であった。また、「幼稚園教育要領に示された授業のねらい及び主な内容並びに全体構造を理解しているか」には有意傾向がみられ、その他の「子どもたちが経験し身につけていく内容と指導上の留意点を理解しているか」、「実践した授業内容は小学校の授業に繋がっていく内容だったか」の項目においては、両群間に有意な差はみられなかった。

(5) 保育内容の指導方法および保育の構想の理解について

保育内容の指導方法および保育の構想の理解についての理解度を比較した結果、「幼児の認識や動き等を視野に入れた保育構想の重要性を理解しているか」に有意傾向がみられたが、その他の項目において両群間に有意な差は認められなかった。

4. 考察

(1) 指導案作成・事前準備について

指導案作成、事前準備について比較した結果、「子どもたちが明るく伸び伸びと充実感を味わえる内容を考えられたか」において、自信がある群の理解度が有意に高い結果であった。弓削田 (2009) による幼児の身体表現に関する学生の意識と実践についての調査においても身体表現は幼児にとって重要な分野だということを理解して、幼児とともに楽しめる

スキルを身につけたいと思う学生が多くいることが報告され、多胡 (2008) による保育者の身体表現遊びについての意識調査の結果からも、子どもたちと身体表現あそびを楽しむことが何よりも大切であると述べられている。そのことから、子ども達が明るく楽しそうに遊ぶことができているかという評価は指導を行う上で重要であり、指導実践を行う中で指導者自身が一番意識しやすい視点であることが考えられる。自分が考えた指導内容を子どもたちが楽しそうに遊び、尚且つ指導者自身も楽しんで行うことができれば、指導者に達成感が感じやすくなる。自由記述の「指導案を作成するにあたり一番重要だと思ったことはなにか」の問いに対しても「子どもたちが楽しめる内容になっているか」を重要視している学生が多く、模擬授業を実践するにあたり、まずは子どもたちが楽しんで遊んでくれることを学生は意識していることが推察される。そのことから、幼児が楽しんで遊ぶことができる動きや表現にはどのようなものがあるかを学生自身が身を持って体験し、そこから子どもたちが楽しいと思う遊びや表現の内容を学生自身が工夫していける授業としての取り組みが必要ではないかと考える。

(2) 指導実践について

指導実践の項目においては、「言葉かけの内容を考えながら指導できたか」、「子どもに伝わるように話すことはできたか」、「指導案で計画していた時間配分で指導内容を展開できたか」、「予定外のことが起こった時、臨機応変に対応できたか」に対する理解度に差が認められた。

「言葉かけ」については、遠藤 (2006) の調査によると、幼児の身体表現における指導が難しい内容として、言葉かけが最も難しいと報告されている。模擬授業を行った学生にとって、自身の伝えたい内容に対する言葉が出てこないことや、子どもの状況に合わせた声かけができなかったりすると、それが自信の有無に影響し、自己評価に繋がりがやすすいのではないかと考えられる。また、遠藤 (2014) の調査では、幼児に対する保育者の柔軟な言葉かけが重要であると述べられており、言葉かけによって、子どもが遊びに安心して参加できる基盤が作られることや、幼児に質問することで幼児に考える機会や応え

る機会を与えることができることが報告されている。よって、幼稚園教員からの言葉かけにより、子どもが表現しようとする意欲を高めることができることとされていることから、子どもに対するさまざまな視点からの言葉かけを、学生に身に付けさせていくことが求められる。本研究結果からも2群間の値に有意な差は認められたが、どちらも平均値が高い値であることから、声かけに対する意識は高いことが分かる。しかし、自信を持って指導できる学生の方が、子どもに対する言葉かけができた認識があり、より適切な言葉かけができたのではないかと推察される。子どもに対する声かけは重要であり、その場に応じた声かけができるようになることで、自信を持って授業をできると思える学生が増えてくることが推測される。

臨機応変に対応することは、予想外のことが起こった時だけでなく、時間配分においても必要な能力となってくる。自信が持てた学生は、計画通りに進めることができただけでなく、時間が少し余りそうなときは、体ほぐしや手遊びをするなどして、臨機応変に指導時間の対応ができていた可能性がある。実践内容は、子どもの人数や教材によっても変わるため、その場の状況に合わせて、授業が中断されないように臨機応変な対応をしていかなければならない。また、幼児の突発的な行動や発言、その時の子どもの様子や遊びの発展に応じて授業内容を変更していくなど、予想外のことが起こった時の多様な状況を想定していく力を身につけさせていく必要がある。そうすることで、さまざまな状況にも対応していくことができ、自分の指導に自信を持って指導できる学生が多くなっていくと考える。

また、両群間に有意差は無かったが、安全への留意に関しては、自信がないに関わらず、ほとんどの学生が重要であると回答していた。実際に、幼児が安心して安全に楽しく遊べるようにすることが幼児指導においては一番重要であると考えられる。しかし、先行研究において、幼児指導では予測できない幼児の行動が多くあること、さらにその後の課題として、安全対策について意識して指導しても克服することは簡単ではない(高原, 2014)、としており、幼児教育は、予測がしづらい中で楽しく安全に活動する必要があることが報告されている。今回

の調査では、安全への留意に対する理解度は両群とも一番高い評価得点であった。この結果からも、安全に対する学生の理解度は高いことが推察される。しかし、安全管理については予測できないアクシデントが起こり得ることから、今後も安全への留意に意識を置きながら指導実践を行わせていくことが重要である。

(3) 各領域のねらいおよび内容の理解について

各領域のねらいおよび内容の理解については、「幼稚園教育要領に示された幼稚園教育の基本を理解しているか」「幼稚園教育における評価の考え方を理解しているか」の項目に有意差がみられた。

自信を持つことができた学生は、幼稚園教育要領の教育の基本や評価への考え方を学び、その内容を理解したうえで、幼稚園教育要領に示された内容を踏まえて指導案作成や実践に生かすことができたため、自信を持つことができたと考えられる。よって、自信を持って指導できる学生の方が、より幼稚園教育要領の内容を理解していることが推察される。その為、自信を持って指導できる学生を増やしていくためには、実践内容だけではなく、幼稚園教育要領に示された幼稚園教育の基本などの理解度をあげていくことが重要であると言える。確かに現場では子どもが楽しく遊べるための実践力が必要となってくる。しかし、幼稚園教育の基本を理解した上で指導を行っていかなければ、実際に実施されている身体表現の授業内容が、ただ楽しく遊ぶための内容なのか、幼稚園教育要領に示されている子どもの豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにするというねらいを達成できる内容になっているのかの差は大きくなってくる。幼稚園教育法(身体表現)の授業においては、幼児教育で求められる指導内容にしていくためにも各領域のねらいおよび内容の理解について理解度を上げていくことが重要であると言える。また、この項目は教職課程コアカリキュラムに示された内容であり、学生が身につけるべき資質能力の部分となってくる。その為、学生の理解度を上げるための保育内容表現の授業指導内容においては、今後も検討していかなければならない。

(4) 保育内容の指導方法および保育の構想の理解について

保育内容の指導方法および保育の構想の理解についての項目では、両群間に有意差が認められなかった。その中でどの項目よりも評価得点が低い結果となったのが「ユーチューブを利用したり、情報機器を活用したか」のICT機器の活用についてであった。情報機器を使用した学生は、ユーチューブから音楽をとるという学生がほとんどであり、授業に音楽を使用した学生は情報機器を使用したか、それ以外の学生は情報機器を使用していなかった。

現在、ICT機器の活用がコアカリキュラムの指導法にも導入されてきたことから、身体表現の授業においてもICT機器の活用が求められる。現在の幼稚園教育法の授業においてICT機器の活用はまだ手薄となっているため、ICT機器の活用の仕方を授業にも取り入れ、指導していかねばならないことが今後の課題としてあげられる。

(5) 模擬授業の振り返りの重要性

本研究は、幼稚園教員免許取得希望者である学生を対象とし、模擬授業体験後にアンケート調査を行うことにより学生の指導実践に対する理解度を調査した。その結果から自身の授業実践に自信が持てない学生が、自信を持って指導していけるようにするために、保育内容（身体表現）で必要な理解を深めなければならない点において考察をしてきた。しかし、どの項目においても自身の授業に自信を持つためには、模擬授業の振り返りと実践の積み重ねが重要となってくるのではないかと考えた。先行研究からも、振り返りが有効であることが示唆されており（高原ら, 2014; 高原ら, 2016）、梅垣ら（2006）の研究からも、学生たちの自信を改善するためには、模擬授業と反省・改善のための学習を何度か繰り返し経験させることが必要であること、また、教員養成課程を持つ大学の役割は大きくなっており、専門知識と指導力を身につけた有能で実践力のある教師を養成するシステムの充実が求められていることが述べられている。本研究においても、自信がある群と自信がない群の2群間に有意差が認められた項目は、模擬授業と振り返りを繰り返すことで、自身の指導実践内容を再考し、子どもの豊かな感性や表現

する力を養い、創造性を豊かにするというねらいを達成できる内容にしていくことで、自信を持って指導していけるようになる可能性がある。しかし、幼稚園教育法（身体表現）の授業は、15コマの授業回数となっており、その中で模擬授業を行うことのできる回数は限られている。そこで、自身の指導実践だけではなく、他の学生の模擬授業を幼児役で体験したり、客観的に見ていくことで様々な視点から学んだりすることが指導技術の向上に繋がる可能性があり、学生の幼児指導に対する理解度の向上に繋がってくると言える。そして、模擬授業の繰り返しだけではなく、専門的知識と指導力を身につけた実践力のある教員を養成するためには、幼児の発達に即して、幼児教育において育みたい資質能力、そして幼児の発育発達を理解させていく必要がある。

今後、いかにして幼児指導を楽しみ、模擬授業を経験する中で、指導に対する自信を付けていくことができるように学生を養成していけるかが教員養成校には重要な課題となってくる。

5. 結 論

幼稚園教員免許取得希望者を対象に実際に模擬授業を経験し、自身の指導に自信を持てた学生と、自信が持てなかった学生の自己評価からの理解度の差を比較検討した。

その結果、「遊びの内容」、「子どもへの言葉かけ」、「時間配分」、「臨機応変に対応する」、「幼稚園教育要領に示された幼稚園教育の基本の理解」についての理解度に、自信を持てた群と自信が持てなかった群に有意差が認められた。このことから、各項目の理解度を深めるとともに、模擬授業の振り返りを行い、自身の指導の再考、改善をしながら経験を積むことが重要であることが考えられた。さらに、他の学生の模擬授業に幼児役で参加し、客観的に見ることで、さまざまな視点から幼児指導について学び、それを自身の授業に生かして指導実践を繰り返すことで自信をもって指導できる学生が増えていく可能性があることが示唆された。

また、今後の幼稚園教育法（身体表現）の授業内容の課題として、教職課程の授業においては、学生に指導実践を行う上での留意点を理解させるのはも

ちろんのこと、さらには、教職課程で共通的に修得すべき資質能力となっている教職課程コアカリキュラムの定める内容を学生に修得させ、幼児の発達や学びの過程を理解した上で授業内容を考えていくことが重要であるといえる。そのために、まずは指導する教員がコアカリキュラムに準じた授業展開を行うため、授業内容の改善をしていかなければならない。

《参考文献》

遠藤晶 (2006) 「幼児の身体表現の指導に関する保育者の意識について - 身体表現の指導に関する困難さについてのアンケートの検討を通して -」, 『武庫川女子大学紀要 (人文・社会科学)』, Vol.54, pp.91-99.

遠藤晶 (2014) 「身体表現遊びにおける保育者と幼児の相互作用を高める指導: 保育者の「言葉かけ」に着目して」, 『教育学研究論集』, Vol.9, pp.1-8.

日野克博 (2003) 「より質の高い教員養成に向けた取り組み - 模擬授業の実践から -」, 『体育科教育』, Vol.51, pp.26-29.

小林美花 (2017) 「表現力豊かな保育者養成を目指した授業の研究 - 科目「身体表現」における授業実践 -」, 『北翔大学短期大学部研究紀要』, Vol.55, pp.49-54.

黒川建一 (2004) 「領域「表現」の意味」, 黒川建一, 『新保育講座 11 保育内容「表現」』, ミネルヴァ書房, p29-31.

松村朋子 (2016) 「学生の身体表現への意識変化に関する研究 - 保育内容指導法の授業を通じて -」, 『白鷗大学教育学部論集』, Vol.1, pp.303-321.

文部科学省 (2008) 「幼稚園教育要領」
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/you/ (2017/10/30)

文部科学省 (2017) 「教職課程コアカリキュラム(案)」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/002/siryo/_icsFiles/afieldfile/2017/07/20/1387656_08.pdf (2017/10/29)

新山順子・高橋敏之 (2014) 「保育者養成における身体表現教育に関する研究の動向と課題」, 『兵庫教育大学 教育実践学論集』, Vol. 15, pp. 79-87.

岡田正章・千羽喜代子他編 (1997) 「現代保育用語辞典」, 『フレーベル館』, p432.

岡崎裕美 (2017) 「保育者養成における身体表現・音楽表現の学習の必要性～グループ研究を通しての学習成果～」, 『千葉敬愛短期大学紀要』, Vol.39, pp.373-381.

下井倉ともみ・土橋一仁・松本伸示 (2014) 「理科を専攻としない学生を対象とした「小学校理科を教える自信」に関する調査 - 理科内容学の視点から -」, 『科学教育研究』, Vol. 38, pp. 238-247.

多胡綾花 (2008) 「保育者の「身体表現あそび」についての意識調査」, 『湘北紀要』, Vol.29, pp.43-54.

高原和子・小川鮎子・瀧信子・矢野咲子・下釜綾子 (2014) 「幼児の身体表現指導における指導実践後のふりかえりの有効性」, 『福岡女学院大学紀要・人間関係学部編』, Vol. 15, pp. 89-95.

高原和子・瀧信子・矢野咲子 (2016) 「保育内容(表現) 身体表現指導における模擬保育後のふりかえりに関する一考察」, 『福岡女学院大学紀要・人間関係学部編』, Vol. 17, pp. 23-28.

高原和子・瀧信子・矢野咲子・怡土ゆき絵・青木理子・小川鮎子・小松恵理子 (2017) 「保育者養成における身体を使った表現(身体表現) 指導の実態」, 『福岡女学院大学紀要』, Vol.18, pp.71-75.

梅垣明美・晴山紫恵子 (2006) 「体育における保育者養成プログラムの検討」, 『浅井学園大学短期大学部研究紀要』, Vol.44, pp.55-64.

柳瀬慶子 (2015) 「保育者養成課程における学生の体育観構築に向けた基礎的研究 - 体育(運動)に対する意識調査を通して -」, 『高田短期大学紀要』, Vol.33, pp.49-57.

弓削田綾乃 (2009) 「幼児の身体表現に関する学生の意識と実践についての一考察」, 『浦和論叢』, Vol.41, pp.135-146.

(受付日:2017年10月31日、受理日2018年1月25日)